

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	田口 英明
主 論 文 題 名： 元禄・享保期上層民の経済思想に見る「作為」と市場経済 ―河内屋可正，伊能景利，田中休愚の事例によせて―				
(内容の要旨) 本論は，河内屋可正（寛永 13～正徳 3 年），伊能景利（寛文 8～享保 11 年），田中休愚（寛文 2～享保 14 年）の 3 人を取り上げ，元禄・享保期に生きた彼らの経済思想，とりわけ市場経済に対する見方，関りかたの共通性を，子孫向けの教訓書，紀行文，村政に関わる文書編纂物，政策提言書といった多彩な史料を用いて浮き彫りにし，社会経済に対して能動的に「作為」を行う主体・思想の展開を見るものである。 実務家の経済思想史研究で代表的なものは，中井信彦氏の幕末の国学者色川三中の研究である。中井氏は，三中の行動と思想を考察し，その双方の影響を受けながら形成された生活空間を構造的に捉える。そうした「日常性次元」の思想を辿る研究手法は小室正紀氏に受け継がれた。「日常性次元」の経済思想とは実務のなかで形成される点で，頂点的思想とは異質なものである。その一方で，それは当時の思潮との緊張関係のなかで醸成されるものでもある。経済実態と当時の思潮の双方からの影響を重層的に捉えるという点に，小室氏はこれら実務家の経済思想を扱う意義があると考え。また小室氏は，その経済思想を研究する場合には，実態区分に応じたそれぞれの時期の特質を見出す必要があると述べる。本論は，この小室氏の指摘を受けて，元禄から享保期という三十年間の民間社会の経済思想の特質とその展開について考察するものである。 17 世紀から 18 世紀の初頭という時代は，江戸時代に適合した儒教の成長を見た時代でもあった。その儒教に主に依拠しながら頂点的思想家の経済思想は大きな展開を見せ，川口浩氏は彼らのなかに「経済主体」の原型の確立を見る。「経済主体」とは所与の経済状況を把握すると同時に，主体的かつ前向きにそれへの適応を図るメンタリティの確立を意味する。本論は，この川口氏の見解に影響を受けつつも，頂点的思想家は自らの思索の論理的な完結性，整合性をより重視し，その思想は実際の経済の動向に必ずしも左右されるものではなかったという見方に立つ。そしてむしろ当該期の経済思想を扱ううえでは実務家の経済思想の方がよりの確であり，さらには様々な知の影響を受けながら形成された実務家の経済思想のなかにこそ，江戸時代全体を通じた「経済主体」の性質を考えるうえでの重要な洞察が得られるのではないかと考える。 元禄・享保期の上層民の経済思想を考えるうえで重要な研究が書物の社会史研究である。当該期に通俗道徳が形成されるなかでさまざま書物に触れ，その言葉を借りながら自らの思想を語り，現状を批判的にとらえる意識が上層民のなかに醸成されたことが横田冬彦氏らによって明らかにされた。本論はこうした読書の社会史研究と経済思想史研究の架橋となることを試みている。				

最後に、本論の分析枠組みとして丸山眞男氏の『日本政治思想史研究』の「自然」から「作為」へというパラダイムを援用している。丸山氏は、享保期の徂徠の思想において「作為」の思想が成立すると主張しているが、本論では頂点的思想家や政治思想と同時期に、否、むしろそれに先行して民間社会の実務家において社会・経済の観察に基づきながら「作為」を志向する意識が芽生えたのではないかという視角から彼らの経済思想を再構築する。そして、同時期の実態観察に基づきながらも、徂徠が市場経済を抑え込む制度を構想したのに対して、実務家はそれを積極的に自分たちの経済的枠組みに位置づけるための「作為」を行ったのではないかという仮説を本論は立てる。

以上の分析枠組みのもと、5章にわたる本論で、3人の人物の経済思想のなかの「作為」の意識を市場経済への対応と関連付けながら論じている。

第1章は『河内屋可正旧記』を素材にして可正の経済思想について考察する。可正の先行研究として安丸良夫氏の見解はその後の可正研究を方向付けるものであり、安丸氏は可正の思想を民衆の主体的な活動を導き、生活実践を促すものであったと評価する。また、深谷克己氏は可正の思想が、宿命論から脱却し、「人為」の実践を重視するものであったと述べる。本章はこうした研究に異を唱えるものではないが、これまでの研究において十分に検討されていないが、可正が繰り返し説く「工夫」という言葉をキーワードに彼の経済思想を考察する。可正が直面した大きな問題は、努力をしても必ずしも報われるわけではないという宿命論的な貧福観であった。可正は貧福を「前因」「天命」とみなす立場を否定し、「人為」を優位に置く。その「人為」の最たる表れが「工夫」という概念であった。「工夫」とは原理・理念に拘束されることなく、生活の細部まで観察したうえで時処位に応じた最適な対応をとることであった。そしてその観察にもとづきながら「当地相応の理り」という在郷町（大ケ塚）固有の経済思想を確立することを可正は求めた。具体的には、商業的農業への適応、状況に応じた農商のバランス配分、適度な貸借関係の維持といったものがある。商業の進展とともに大都市大坂の経済論理が在地社会に浸透するなかで、「工夫」を通じて商業的農業において成功することを目指す。しかし、その一方で大ケ塚の枠組みを超えて「商売」に傾くことや「貧福和合」を乱すような過度な貸借関係に陥ることを非難する。「工夫」とは、都市に包摂されない大ケ塚独自の「当地相応の理り」を確立するために、日々の経済活動において的確な判断を下す経験的（実験的ともいえる）な智のありかたを意味していたのであり、その点で元禄期畿内上層民の経済思想において「作為」の意識が芽生えていたと結論付けている。

第2章は、伊能景利の紀行文を素材とし、そこから「無常」観を基調とする社会経済観を析出したうえで、教訓書の内容と比較考察することを目的とする。これまでの経済思想史研究において紀行文が取り上げられることは少なかったが、実務家の経済思想をより広い生活レベルの視点から浮き彫りにするうえで有効であると本章は考える。景利は、緊張が強いられる日常生活を離れ、精神的な安堵を得るための巡礼を行いながら、文芸の世界に戯れることに最良の楽しみを覚える。それとともに道中において「志」があるにもかかわらず困窮のなかに暮す人々と接するなかで景利は「無常」を感じる。人の貧福は不如意であり、人間性や能力ではなく、「前因」によって決まる。そのような不条理

な現実を景利は「無常」という仏教的観念によって受け入れる一方で、自身の恵まれた境遇を「先祖の祿の余慶」と考える。このような「無常」観に大きな共感を寄せる一方で、「家」の連続性を希求するというのが彼の社会経済観であったが、そのアンビバレントな見方は彼の井原西鶴の『日本永代蔵』の受容の仕方にも表れている。『日本永代蔵』には「才覚」を称揚しつつも、そこには限界があり貧富は「仕合」によって左右されるという「アイロニー」が読み取れるとの指摘が中井信彦氏によってなされている。景利も同書を引用しつつ、紀行文では貧富が「三面の大黒殿のまゝにもならず」ないことを強調する一方で、教訓書では勤勉・努力をして「家職」に励むことが「和国の風俗」と述べる。このように景利は「無常」観や宿命論的な貧富観に人間の本質を見出しつつも、近世初期から続く「家」の継承を願うという「アポリア」に正面から向き合った人物であった。また、当該期の上層民の経済思想を考えるうえで仏教的思惟の影響を等閑視することはできず、「心」の正しさがそのまま「齊家」につながると考える朱子学は、経済社会の冷酷な現実に対処する実務家の経済思想と距離があった。むしろ、「三面の大黒殿のまゝにもならず」という世の矛盾を、「無常」という不合理性のなかで受け入れる仏教的思惟のほうが、実務家が経済社会を前向きに生きるうえでの拠り所になったといえる。

第3章は村の指導者という公的な側面から見た景利の経済思想を考察したものである。景利は天正期以来の近世百年間の在地社会の文書調査・編集作業を最晩年まで続けるが、その動機は近世初期に形成された在地社会の経済的枠組みと、新たな経済活動の間に生じた齟齬を係争に発展させることなく調整するための資料的基盤を作成することにあった。その点を考察するために本章では景利が経験した2つの大きな経済事象を扱っている。第一に市場の発展である。佐原村では元禄期を境に常設店舗の形成が見られたが、市日に市場以外での売買を禁ずる寛永期の先規と常設店舗の営業をめぐる村内が対立し、宝永期に村方騒動に発展する。景利はこの係争の原因を先規の硬直性と、村役人層によるその適応範囲に関する恣意的な解釈に求める。先規の成立事情を解明し、その適応範囲を歴史的に実証することを通じて、先規と新たな経済活動の間に調整を図る能力を景利は村役人に求めた。第二に幕府地方行政の一元化・広域化である。川除普請については元禄期に支配関係によらず村高に応じて人足が徴発される体制になった。普請件数が増加し、幕府と在地社会の負担が増加するようになった原因を、他村への「引人足」を回避する在地社会の対応に景利は求める。村主体の普請から幕府主導の普請に変化する過程を振り返りつつ、普請件数の増加に歯止めをかけ、幕府と在地社会の負担を減らす普請体制を景利は最晩年まで模索する。また、享保期に佐原村新田で定免制の導入が決まるが、延宝期に佐原村新田は高い石盛を付された検地によって、実際の収量よりも相対的に高い年貢が課せられた歴史的背景があった。その歴史的事情と農業と商業の不均衡な発展という佐原村の経済的枠組みを幕府役人に説明し、正当な定免を設定するための交渉力を村役人に求めた。景利は在地社会の先規に精通し、それと新たな経済活動との間に調整を図ることが「村長」の責務であると考えた。ここからは文書という確固とした史料に基づきながら、佐原村固有の経済のありかたを求めた景利の模索が明らかになるとともに、経済問題を考えるうえで経済制度に対する

関心が在地社会に芽生えた点を本章は指摘する。

第4章は、田中休愚を考察対象に加え、主に景利と休愚の比較考察を通じて、享保期上層民がいかんして宿命論的貧福観を乗り越えようとしたかについて検討したものである。ここでのキーワードは「心を付」けることである。可正、景利と同様に休愚も俳諧を嗜み、休愚の自然を見る感性には常に「変」が存在した。そして社会においては近世初期に成立した根幹制度の理念（「理」「常」）を維持しつつも、社会の「変」に合わせて柔軟に対応することを理想とした。また、「変」と並んで休愚の社会を見る際のキーワードとなったのが「辰巳上り」であり、これは元禄期以降、人々が「分限」を越えた奢侈をするようになる一方で、勘定不足や困窮と隣り合わせになるという世相を指すものであった。そして、この認識は景利にも共通するものであった。この状況に対応するために、両者が主張するのが普段より「心を付」けることであり、それは経済生活の細部まで観察し、事象の善悪・是非・軽重を判断する観察主体の成立を指していた。景利はそのような生活に密着した「本心」を身近な書物の言葉を借りながら説く。休愚は経済生活を戦場と捉え、それぞれの家職に応じて最善手を打つことが「五常の根元」とであると考え、そしてそれが「術」の習得・実践であると述べる。この意味で、休愚の「心」とは、状況を適切に観察し判断する実践的な知性であると同時に、現在の社会経済状況に対してなんらかの「作為」を行う主体性の確立を意味したのである。そしてその主体性は、経済社会において「家」の継承・拡大を図る一方で、上下の「隔」を解消し、「上下和合」のために下の者に「情け」をかける観察力も求められた。休愚においては可正や景利に比して宿命論的貧福観は後景に退き、「術」の実践という形で「作為」がより強調されるようになる。そして、第5章との関連で景利と休愚の相違点として、休愚が「心」のみでは「辰巳上り」という当該期の経済問題に対処することが困難であると認識していたことに触れ、徂徠と同様の制度による生活統制が必要であると考えていた点について本章では言及している。

第5章は、享保期民間社会における「作為」の経済思想の到達点として休愚の制度観について、『民間省要』の道中論と普請論を取り上げて考察している。道中論において、元禄期以降下級武士による道中制度の濫用が見られた結果、宿駅にかかる人馬の負担が増え、在地社会が疲弊するようになったと休愚は述べる。これを改善するうえで「理」（制度の基本理念）に精通する下級武士と、「事」（制度運用上のスキル）に精通する「禄重キ」百姓の相互作用的な実践を通じて制度を運用すべきだと考える。その主張の根拠として、道中制度は一律的に適応されるが、道中の実態は宿駅に応じて異なっている点を挙げる。川除普請論においては、元禄期以降幕府の普請政策が広域化するなかで、「術術」を用いて利益を貪る商業資本である「術商」が暗躍するようになったことに休愚は警鐘を鳴らす。彼らは入札を通じて普請を請け負うが、川除はむしろ劣化し、幕府と在地社会の負担が大きくなったと批判する。休愚は、川除普請は「所役」とする方法を提案するが、その主張の背景には、普請を幕府の主導のもとで請け負わせた場合には江戸で労働力と資材を調達するため、より費用が大きくなるという認識があった。当時の普請は、役負担という封建体制の基本原則が働いていながら、そこにかかる労働力と資材を市場で調達しなければならないという市場経済に依る側面も大きくなっていった。休愚は「禄重キ」百姓への請け負いが、在地社会の現状を破壊しない形で市場の展開を受け入れるうえで理想的であると考えたのである。元禄から享保期にかけて都市の市場は大きく成長するが、在地社会の経済は都市の市場に完全に包摂されていない

市場を軸に展開していた。休愚の制度論は、このような在地社会の市場の独自性、自律性を反映した経済思想に支えられていた。それは、「役」に基づく資源の配分と、市場の機能とを適切に調整することを目指した新たな経済思想への模索のなかで醸成されたものであった。そして、普請の主体となるのが、普請の「術」に長け、「天地の間」に「限り」がないという信念に基づいて公共のために「作為」を実践する「禄重キ」百姓であり、また幕府もこうした「術」の担い手を制度運用に参画させるべく制度を「作為」する必要があると考えたのである。

以上の5章にわたる考察を通じて結論では可正、景利、休愚の思想の3つの共通性を指摘したうえで、元禄・享保期の上層民の経済思想における「作為」の展開を市場経済との関連でまとめている。

第一に、富者のありかたについての考え方である。三者とも富者であるためには「工夫」、「心を付」けること、「術」の実践が不可欠であり、自身が観察主体になり創意工夫することが必要であると考えた。しかしその一方で、貧富は「仕合」に左右されるものであるとも認識していた。それゆえに富者が下位にいる者を見下し、「威勢」を張ることを三者ともに強く禁ずる。富者は、「堪忍」や「忍」の実践によって在地社会のなかで「和合」を実現すべき存在であり、そのために「振舞」などの贈与・互酬を行うべきであると考えた。市場での競争は、必然的に勝敗がつく。その影響を和らげる市場によらない経済的な機能として「和合」・「堪忍」・「振舞」といった共同性の働きが重要視されたのである。

第二に、三者ともに都市の市場経済に包摂されない地域独自の経済思想の確立を図ったことである。三者は、それぞれ市場経済への適応を図るが、彼らがみていた市場とは価格メカニズムは働いているが、多分に地域性を持ち、既知の人間関係の交渉を通じて価格が決まるような市場であった。彼らが生活した経済環境は封建村落であり、役の体系を通じて生産要素が交換、配分される経済にあったが、そのなかで部分的ではあるが、しかし急速に市場化が進んでいる状況にあった。そのなかで役の体系と市場化をどのように折り合わせていくのかが在地社会のリーダーに強く求められた。可正は「当地相応の理り」を求め、景利は近世百年の在地社会の慣例と市場経済化に折り合いをつけることを模索し、休愚は宿駅ごとに事情は異なるために制度の一律的な実施を批判する。こうした姿勢からは当該期の上層民の地域に根差した市場観が見て取れる。

第三に「書く」ことの重要性である。休愚は元禄期を境に幕府の制度と実態に大きな齟齬が生じ、それが在地社会の疲弊につながると述べるが、そうした変化に幕府の役人、在地社会に精通する人間、さらにはそれを「書く」まで休愚自身も気づかなかったことに驚きを示している。「書く」という行為を通じて、休愚の現状分析力は磨かれることになった。景利も近世百年の歴史をまとめるなかで現在の経済問題を歴史的に考える姿勢が生まれ、その分析を通じて在地社会に安定をもたらすことが「村長」の責務であると捉えるようになる。可正は、農民が「農人帳」を付けることを求める。「書く」ことによって日頃の「工夫」を客観的にとらえることができ、それによって宿命論的な貧富観を乗り越えようとしたのである。

最後に、元禄・享保期の経済思想における「作為」の思想の形成と展開をまとめる。元禄・享保期の民間社会の経済主体が直面した最大の問題は、勤勉努力と経済の不如意性に関わる問題であった。これは当時の儒教思想や仏教思想が民衆に受容されるなかで正面から受け止めなければならない問題でもあった。可正は「工夫」の実

践を強調するが、それは在地社会の実態観察のうえで、原理・原則に固執せずに柔軟に対応していく経験的、実験的な智の実践であり、それを通じて宿命論的貧福観からの脱却を図った。その問題に正面から知的に向き合い、人間が直面する不如意さに人間の本質を感じとったのが景利であった。しかし「無常」観に共感しつつも、生活全般にわたって「心を付」けることを強調し、事物を観察するのみならず、それに基づく実践を強く求めた。さらに「村長」の立場においては、「書く」ことを通じて在地社会の百年の歴史を調査・分析し、それに基づいて現実の経済問題を制度の構造的な問題に引き付けて考える意識が芽生えていた。こうした制度に対する関心が景利における「作為」の経済思想の（萌芽的ではあるが）表れであった。この動きを大きく前進させたのが休愚であった。宿命論的貧福観は、彼においては後景に退き、自ら経済生活を切り開いていく力動的な姿勢がより強まっていく。休愚において経済活動を実践し、正しく導くうえでキーワードになったのが「術」であった。「術」とは戦場において最善手を取るような「作為」的な姿勢であった。在地社会の資源を適切に利用し、困窮する現状を改善するために、正しい「術」を「禄重キ」百姓が身に着け、それを活かすことが必要であると考えた。元禄・享保期の上層民の経済思想における「作為」の意識は休愚において、「家」の継承という領域を越えて、より広い在地社会の安定・発展に資する経済制度を作りあげるという領域に達した。元禄から享保期にかけての在地社会は基本的には役の体系のなかにあり、その経済活動は既知の人間関係に軸足を置くゲマインシャフトの面が強かったが、そのなかで部分的ではあるが急速に進む市場化に適応していく能力が、リーダーにとって必要であると彼らは考えた。このように在地社会の経済思想における「作為」の意識は、元禄期に芽生え、享保期に一つの高みに達する。それは在地社会に根差し始めた市場経済の発展を背景にし、それを都市の市場経済に包摂させるのではなく、また徂徠のように制度によって抑え込むのでもなく、従来の在地社会の歴史的枠組みのなかに適切に、かつ肯定的に位置づけていこうとする上層民の模索のなかに生れたのである。